文章の中に「自分」を出していくための作文指導の試み

福田伸子

はじめに

私は今まで「とにかく、常に機会をとらえて書かせる」ということを念頭に置いて授業をすすめてきた。けれども、往々にして生徒達は「自分」を横に置いて書き、適当にまとめるという術を使う。それでは書く楽しみもなければ、それを読む楽しみもない。

「自分」を出させるためには、いろいろな視点をこちらが設定してやることが必要である。どういう機会に、何について、どういう視点で書かせれば、彼らは「自分」を出してくるのか。今回は、五つの場合における例を紹介してみようと思う。

一、意見を書かせる

「意見文の指導」などという文章を読むと、「環境問題について」「校則について」「若い人の言葉遣い」などが題材の例としてよく取りあげられている。しかし、下手をするとこれらは、単なる資料集めプラス「これが私達の課題だと思います。」で終る文章になってしまう。また、賛成するにしても反対するにしても、何となく書くパターンが見えてくるような題材でもある。意見文の題材は、書き手がそれについて悩み、考えることがあってこそ、題材となり得るのではないだろうか。

今春、大学に合格した卒業生が、こんなことを言っていた。「小論文が書けるかどうかは、あらゆる問題について、家族や友達とどれだけ話し合っているかにかかっていると、僕は思う。」と。

確かに「その人でなければ書けないこと」というのは、その人の生きる環境（持ち得る情報も含めて）そのものであるとも言える。

どこをつつけば「意見」が出てくるか、は彼らの会話の中にころがっている。「あなたでなければ書けないこと」

の糸口を数多くこちらが握っておいて、そういう視点をいくつか設定することによって、意見文の内容は「単なる資料の報告」から脱皮すると思う。

進路のことを書きます。もう今年は受験生だと思うと、とても気が重くなります。この前中学二年生に進級したと思ったら、もう三学期になっているし……。こんな状況にたたされても、僕はまだ、自分の未来がうっすらとも見えません。

このままどこかの高校に行って、どこかの大学を出て、どこかの会社に就職して、平凡な人生を送るのでしょう。そんなのいやだ。歴史に残る風来坊になるんだ！……って言っても、何をすればいいのかわかりません。僕はとっても弱いから、ひかれたレールの上から脱線する勇気がないんです。強い人間になりたいと、いつも思っています。

（男子）

これは「充実した日々を過ごすためにはどうしたらよいか」について書かせた時に、まず紹介した、生徒の文章である。視点の設定にあたって、教師からの問いかけの形をとる他に、日頃から班ノートなどの生徒の文章で、あとで使えそうな内容のをコピーしてとっておいて、問いかけのかわりにするという方法がある。

また、教師自身が、問いかけの形ではなく、自分の意見を書いて提出し、視点を設定することができる。中二より上くらいだと、教師の考えにひきずられずに答える力を持っていると思う。

次に、教科書に沿って、機会あるごとにどのようなものを書かせていくことができるのか、光村図書の「国語2」「国語3」を使って試みた例をあげていくことにする。

二、感想を書かせる

- 字のないはがき　向田邦子（2）
- 子馬　ミハイル・ショーロホフ（2）
- 鈴の鳴る道　星野富弘（3）

これらは、学習を終えて「感想を書こう。」と言うだけで、すぐ生徒が書き始める教材である。「字のないはがき」は、父親の愛情、家族の愛情に焦点をあてて、自分の父と重ね合わせても、少しつき放しても書くことができる。又、この教材は「生活を書かせる」という部分でも使える。

私は、向田邦子さんのお母さんのような人になりたいなあと思いました。この本では、お母さんのことは全然書かれてなかったけれど、私はなんだかお母さんのことが、とてもよくわかったような気がします。向田邦子さんの一家

は、お父さんが中心のように見えるけれど、かげではお母さんが中心だと思います。（女子）

「子馬」では、中隊長について書くか、トロフィムについて書くか、選ばせたこともあったが、この時は、あえて「第三部の、激しい戦闘の後の中隊長」に限定した。立場と、本来の自分という、誰にでもある二つの面が、この登場人物にはっきりと出ているので、それをどう見るかが知りたかったからである。

戦場では、自分が生き残るためには、イヤでもたくさんの人を殺さなければならない。子馬と一緒にいると、自分が生き残ろうという気持ちより、人を殺したくないという気持ちの方が強くなってしまい、戦争ができない。だから、子馬を殺さなくてはしょうがない。中隊長は、子馬が可愛いので、自分では殺せないのだ。（女子）

「鈴の鳴る道」は、車椅子の生徒が実際に通っているうちの学校の生徒にとって（そして、一年生の時から身体障害者に対する差別の問題について学習してきた彼らにとって）自分の中で各々考えてきたことを、つついて吹き出させる内容を持つ教材であった。全員のをプリントに載せたいと思うほどだった。

もし私が困難にぶつかったらどうしてるだろう。困難なことに打ち勝つためには、もちろん精神的に強い人間になることを最も必要とするのはあたりまえだけど、周囲の人達……例えば友達、親、兄弟、先生など、あたたかい心で見つめてくれる人達がいないと、困難なことに勝てないかもしれません。星野さんも、やさしい母親やお姉さん、そして同じ病室の人などの愛につつまれてこそ、首から下が動かなくなっても、強く鈴の音を鳴らし続けている面もあると思いました。自分が助けを必要とするのとは逆に、他にも助けを求めている人がいると思います。そのためにも、自分は何の力にもなれないかもしれないけど、がんばりたいです。（女子）

車椅子に乗っていると、本当に一センチの段でもいやな気になってしまう。僕がいた若草園でも全員言っていた。だけど、自然は好きだとみんな言っていた。星野さんは強い人だと思う。やっぱり車椅子に乗っていると、外の世界を見るのは誰だってこわいし、自分勝手にいろいろな事を考えてしまう。僕だって、最初牛田中学に来た時も、いろいろ考えてしまった。でも外の世界にどんどん出て行くべきだと思う。（男子）

- 扇の的（『平家物語』から）（2）
- 走れメロス　太宰治（2）
- 車掌の本分　かんべむさし（3）
- 夕鶴　木下順二（3）

これらの教材は、はっきりと視点をいくつか設定して書かせた。

○扇の的―古典（『平家物語』）の面白さ・与一の気持ち・当時の戦・想像を書く（その日の与一は……。）

『平家物語』は、まず平家と源氏の、戦に対する考え方の違いがうきぼりになった。この対照的な考え方が、生と死を分けたと思う。また、その状況がわかりやすいように、比喩的な表現や、細かい描写など、独特の表現がある。（男子）

この物語は、何かすごく、人間のおそろしさが出ていると思う。自分の晴れ姿が見せられる時には、失敗を気にして神に頼んだりしているのに、いざ敵となれば、自分をほめてくれるのもかまわず、ためらいもなく射てしまう。こういうところが人間のこわいところだと思った。（女子）

○走れメロス―メロスの気持ち・信じることと疑うこと・今、もしメロスがいたら・想像を書く（話の続き）

「疑う」ということは、自分の心をも疑い、どんどん自分の心を狭くしていると思う。人を信じなければ、相手の人だって自分のことを信じてはくれない。信じるということは、まだいろんな形で望みを捨てないでいるということだと思う。人は誰でもそういう気持ちを持っている。でも、それをどれだけ強く思うかによって、それぞれの生き方が違ってくるのだ。（女子）

○車掌の本分―作者が言いたかったことのひとつは・車掌タイプの人間と運転手タイプの人間

私利私欲に走る人間、相手のことを理解していると思い込んでいる人間、そんな人間達に押さえられている力の弱い人達、という今の社会の形。みんなが動けば止められない社会を、遊園地に例えたんだと思う。（男子）

○夕鶴―つうの愛情・わがまま・機屋をのぞくことの持つ意味

やさしさだけが愛情だと思っているが、人間は違う。与ひょうどんはやさしいが、つうが愛しているということが、よくわかっていない。（男子）

ある物が生まれるとか、新しい物ができる所だから、のぞいてはいけないと思う。女が一生懸命汗をたらし、乱れて作っているところを見せたくないから。（男子）

視点を設定することによって、それぞれの興味とレベルに応じて、ある程度の個別化をはかることができる。

三、イメージを書かせる・想像して書かせる

- 盆土産　三浦哲郎（2）
- 短歌の世界　玉城徹（2）
- 月夜の浜辺　中原中也（2）

前述の「扇の的」でも、「与一の気持ちを考えてみよう。」と言ってすぐ書ける生徒もいれば、そうでない生徒もいる。机間巡視をすると、書こうとしている生徒の中にでも「自分で考えたことでいいでしょう。」と聞いてくる場合がある。あたりまえのことのようだが、多分それは「テストの解答のように書かなければいけないのだろうか。」という不安だと思う。

それを逆手にとって、「とにかく勝手に細かいところまで想像してみよう。」と言うと、意外と自分らしさが出てくることがある。ちょっとした違いだが、「その日、与一は眠りに落ちる前にこう考えた。」という設定にしてやるわけである。

同じように「盆土産」では、その後、少年が父にあてて書いた手紙の形をとって、少年の気持ちを想像させた。題は「北の国から'88」（このドラマは、ナレーションが、少年の手紙形式の語りになっているからである。）

前略。父ちゃん、元気か。母ちゃんにえびフライを食べさせてあげたくて、あの小さいエビをかきあげて、墓にそなえてあげました。父ちゃんの買って来たエビフライとは、似ても似つかないけど、これでも母ちゃんは喜んでくれると思うよ。必ず正月には帰って来てね。婆っちゃは元気です。まだ死なんぞ、とうなっています。姉っちゃは「えびフライ」と一日一回はうなっています。まだもの足りないようです。よっぽどえびフライがおいしかったんだな。また正月の土産は、えびフライか、それよりうまいものを頼みます。それでは元気で。さようなら。父っちゃ、かぜひくなよ。自分ばかりえびフライをくうなよー。（男子）

「短歌の世界」では、導入として俵万智の「サラダ記念日」を使い、イメージを広げる練習をしてから教材に入った。その歌からまわりの様子を考え（色、音、風の匂いなど）それを感じながら、その中にいる人物の気持ちを読んでいく、という訓練のための、文章化である。

中原中也の「月夜の浜辺」は、幻想的で、さまざまな解釈ができる。浜辺に落ちているボタンも、それを拾った「僕」も、何を表すのかは、ひとつに限定できない。こういう教材は、イメージを書かせると、自分の考え方や気持ちが反映されておもしろい。

このボタンは、自分の失敗した出来事です。忘れたいと思い、捨てようとするが、もう一回挑戦ということで、捨てられず、自分のものとするのです。（男子）

波で運ばれてここまで来て、月が出ているボタンが見えて、自分が歩いているからボタンが拾えた。ボタンを拾う運命だった、と感じた。（男子）

四、生活を書かせる――教科書の教材を利用した場合――

- 言葉の力　大岡信（2）
- クロスプレー　五味太郎（2）
- 短歌の世界　玉城徹（2）
- 字のないはがき　向田邦子（2）
- 三十五億年の命　中村桂子（3）
- 春はあけぼの　（『枕草子』から）（3）

「言葉の力」では「言葉」という視点から生活を書くことができる。特に中学生は「言葉づかいが急に悪くなった」と大人にさんざん言われる時期であること、言葉についての情報が多いこと、転校生が多く、方言に敏感なこと、などなど、ひと口に「言葉」と言っても、書くにあたっていろいろな視点が設定できるのが良い。

「クロスプレー」では「あの頃」という題で、小さい頃の思い出を書かせた。小さい時のことというのは、もう何度も思い出したり話したりしているので、まとまっているし、生徒にとって最も書きやすい題材のひとつである。

「短歌の世界」では、それぞれ短歌を作らせて、ついでに自分で批評も書かせてしまう。日ごろ気になっていること、思っていることを短歌にし、又それを他人のように解説するおもしろさがある。

○花束の薔薇にかくれるかすみ草みつけられるのを待ち望む様に（自分をかすみ草におきかえて書いています。脇役を演じる私は、誰にみつけられるのかと待ち望んでいます。）

○まだ鳴らぬ電話の前で時計見る静かな時ぞただに過ぎゆく（電話のかかる時間なのに、まだ鳴らない。「どうしたのかな……。」と思いながらも、どうすることもできない。時計のカチカチだけが響いている。待つことのせつなさと、ため息の聞こえてきそうな様子がよく出ている。）

「字のないはがき」は、これをきっかけに家族について書かせることができる。家族といえば、一番良く観察できるし、いくらでも書けそうな題材だが、少し離れて考えることをしなければ、「どこにでもある普通の家族」で終ってしまう。「字のないはがき」を学習することによって「○○はこういう人」という、人間としての見方を得られるため、書きやすくなるのである。

「三十五億年の命」は説明文であり、ゴキブリについて

書かせるのは単なる遊びのように思えるが、これで20～30分くらいゴキブリのことを話したり書いたりしていると、なぜ筆者が最初「人間もゴキブリも皆同じ仲間です。」という文で始めたか、すぐ理解できる。

「春はあけぼの」では、学習する前に、それぞれの季節について書かせると良いと思う。まず、自分達の今の感覚を先に出させておいて、清少納言も私達と同じ人間として、季節をどう感じていたか、という形で学習に入るのである。前に書かせるか、後に書かせるかを、教材によって変えていくことも大事なことだと思う。

○冬は朝。学校に行く時の寒さ。鼻は真っ赤、手はしわしわで「ピース」が出来なくなり、腰をまげて、前の人でなるべく風をよけて行くのだ。（男子）

○夏は、十二時～一時ごろ。縁側で、うちわ片手に冷たいそうめんを、音をたてて食べる。外ではセミが鳴いて、家の中ではＮＨＫの「昼のプレゼント」がなっている。

五、生活を書かせる―教科書から離れて―

それぞれの家族の話や、学校生活は、まさしく「自分でなければ書けないもの」である。これに「今書いておかなければ、なくなってしまう」という、もうひとつの価値が加わったら、もっと彼らは、書くことの意義を感じるのではないだろうか。

直接のきっかけは、四年前に見た映画だった。「ヒロシマという名の少年」というその映画は、原爆資料館に展示してある、帽子と服とゲートルだけの少年の像が（これらは、三人の少年の遺品で、「三位一体の遺品」と呼ばれている。）現代の広島によみがえり、それぞれの親にひと目会いに行く、というストーリーである。

その少年が、一緒に家族をさがしてくれる少女と出会うのが、牛田にある工兵橋の上だったのだ。白いこのつり橋がスクリーン一杯に写った瞬間、あまりの美しさに驚いた。そして、「こんなに美しい橋があるのに、今まで何も感じずにいたのか。」という思いと、「この橋もいつかはなくなってしまうのだろうか。」という思いと。

街はどんどん変わっていく。牛田も、新交通システムの工事が始まり、昨日までここにあった道路が、今日は数十メートル先に動いている、ということがある。古い建物もいつかはこわされる。映像にしてそれを残すことができない私達は、文章によって街を残しておく他はないんだと思った。しかも、自分達がこの街で過ごしてきた時間を、一緒に文章で封じこめておくしかないんだと。

牛田についての本を作る

◎授業のねらい

・自分でなければ書けないことが、それぞれの生活の中にあることに気づく。

・「書いて残す」ことの意義を認識する。

・相互に評価し、批評の大切さを知る。

◎授業の展開

・第一時……(1)先輩の書いた、牛田町内のいろいろな場所についての文章を読む。

(2)次の時間へのヒントにするために、「自分の選んだ場所のＴＯＰ３」を書く。(例……大好きな場所、良く行く店、遊びの場所、自然を感じる場所など)

・第二時……それぞれの場所について、Ａ～Ｆの項目から選んで作文を書く。(何項目書いても良いが、場所、項目を変える時は、新しい原稿用紙を使う。出来たら次の紙を取りに来る。(資料)

Ａ　昔ここでこんなことがあった。
Ｂ　この場所について、自分はこう思う。
Ｃ　知らない人に牛田の街を紹介する。
Ｄ　徹底比較！
Ｅ　牛田の風景の写真に似合う言葉、文章をつける。
Ｆ　その他、牛田の街について。

・第三時……他の人の作品を読んで、気づいたことを書く。(国語辞典と、表記上の注意のプリントを使って。)

・第四時……第三時に書いてもらった気づきを参考にして文章を直す。

・その後……国語係が、牛田の街の風景の写真を撮って来る。

製本をする。

第二時では、説明後五分くらいすると、教室はシーンとなり、物も言わずに書いては次の紙を取りに行き、また書いて……という状態だった。項目の設定は工夫したつもりだが、Ａを選ぶ生徒が多かった。Ｅは転校生のことを考えて設定したつもりだったが、意外な生徒がＥの用紙を取りに来たりして、なかなか面白かった。

第三時は、班（六人）にして、例えば一班の人が書いたのを二班全員が読み、相談しながら気づきを書くという方法をとった。送り仮名の間違いや、助詞の使い方の間違い

など、思ったより厳しく、丁寧に読み合っていた。
又、その人の個性を考え合わせて、「ここはこのまま直さない方がいいのではないだろうか。」など、班で話し合って作業を進めていた。しかも、「自分も漢字では書けないけれど、人がひらがなで書いているのを見ると、何かおかしい言葉」というようなのは、ひとつひとつ辞書で調べて書いてあげていた。

夏休み前の縮時の慌ただしい時期だったため、取材の時間をとることができず、頭の中にあることで書かせた。だが、比較的時間のとれる、二年の三学期あたりにこの授業を組めば、家の人に話を聞いたりして、もう少し別の広がりをもったものができるかもしれない。
書く意義のある材料をさがすのは、その時間を生きている者にとっては難しい。だから、先に生まれてふり返ってみて「こういうものを書くと良かった」と判断できる私達が、それをさがして提示してやれば、いくらでも書けるということがある。教師自身、それをさがす力を身につけなければならない。

○項目A　牛田観音寺の山
牛田観音寺の山はすごいじゃまもので、山をまわって帰ると、山をつっきって帰るより十五分くらい損する。いつも土曜日に絵の教室があって、サンベルモの辺りまで行って、その帰りに山によく入った。
まず墓場があって、その後に傾斜角90度と言われる坂というか、崖がある。そこは自力では登れないので、ロープがある。ここが一番たいぎくて、道具を上に投げて、ロープをつかんで登る。つらいけど、一番ここが楽しみだった。その崖を登ると、二十メートルくらい坂があって終りだ。
何かすごく得をしたような気になって、家に帰ると、普通に帰るより一時間オーバーだったりして。今はない感動を味わっていたのかな。（男子）

○項目C　遊びの場所
まず、第一に紹介するのは牛田山です。ここはとてもおもしろいのです。なぜかと言うと、食べる物もあるし、遊ぶ場所もある、それに眺めも良いし、空気もおいしいからです。
食べる物は野いちごやあけびなど、たくさんあります。遊ぶ場所は山全体だけど、池や畑、竹林、貝塚、ターザン、けもの道など、考えれば無限にあります。眺めの良い場所は、道をはずれた大岩。ここから見る風景、頂上などは最高です。空気は、そのへんのふくろで山のを取って、町で吸ってみたらわかると思います。ここはおすすめです。
次に紹介するのが太田川です。ここは夏、便利です。まず泳げます。ざぶんと入れば、天然の流れるプールになります。とても深いところがあるので、スリルも楽しめます。

ただ、「おぼれる。」などとさけぶと、警察が来るので、気をつけた方がいいです。前、本当に警察の人が来て困ってしまいました。

また、母さんに喜ばれるということもあります。そう、ここではしじみがとれるからです。あまりとりすぎると腰が痛くなってしまいます。しじみは、深い所と浅い所の中間によくいるので、そこをとるといいでしょう。針にエサをつけて投げこんでいれば勝手につれるという、簡単なドンコつりも出来ます。

次に池です。「おおいけ」という池があります。この池は魚もいるし、とんぼや虫がたくさんいます。どぶ貝という、ムール貝みたいなのもいます。これは残念なことに工事でつぶれてしまったので見ることができません。でも、タイムトラベラーなら大丈夫だと思うので行ってみて下さい。

次に「しょういけ」と秘密の池を紹介します。「しょういけ」はイモリがいて、イモリつりが楽しめます。糸にソーセージをつけて、糸をおろしていくと、イモリがくいついたところで糸を引くのです。そうすればつれます。でも蚊が多いので、半ズボン、半そでは禁物です。秘密の池は牛田の山の奥の方にあります。いかにも不気味で、昼でもうす暗いのです。ここは、誰が何のために作ったかわかりません。ゆうれいが出たことがあるので、きもだめしに使うといいでしょう。

あと、風さんにもってこいの場所があります。それは竹林です。風さんが通ればすばらしい音が出ます。とても身が落ち着きます。どうぞ行ってみてはどうでしょうか。ほかの生きもののみなさんにも教えたい場所があるのですが、時間がないのであしからず。それでは紹介を終ります。

（男子）

おわりに

私は学生の頃、読書感想文というものにさえ、「自分」を出すことができなかった。ところがつい先日「読書体験記」という言葉を耳にした。読書体験記—この言葉をもっと早く知っていれば……。つまり、読んだ本は単なるきっかけであって、それに「自分」がどう出せるか、というのが、この言葉の意味するところであろう。それが読書感想文なのだ、ということが、私にはわかっていなかった。

文章があれば、必ずそれを書く人がいる。読む時はその「書き手」を読み取り、書く時には「自分」を出す。そのあたりまえのことを忘れないように、これからもいろいろな文章を書かせていきたい。

（広島市立牛田中学校教諭）

【資料】

なまえ　　つ

十四とこいつの本が共の NO.3

世紀に　つ縁に　　つ地に

いつ縁は三島の恋の恋は
////に縁へ。

↑

学問	学生・勉強

①本当に　　つ	
②本当に　　つ	
③本当に　　つ	
④本当に　　つ	
⑤本当に　　つ	
⑥本当に　　つ	
⑦本当に　　つ	
⑧本当に　　つ	
⑨本当に　　つ	
⑩本当に　　つ	
⑪本当に　　つ	
⑫本当に　　つ	
⑬本当に　　つ	
⑭本当に　　つ	
⑮本当に　　つ	
⑯本当に　　つ	
⑰本当に　　つ	
⑱本当に　　つ	
⑲本当に　　つ	
⑳本当に　　つ	
㉑本当に　　つ	
㉒本当に　　つ	
㉓本当に　　つ	
㉔本当に　　つ	
㉕本当に　　つ	
㉖本当に　　つ	
㉗本当に　　つ	
㉘本当に　　つ	
㉙本当に　　つ	
㉚本当に　　つ	
㉛本当に　　つ	
㉜本当に　　つ	
㉝本当に　　つ	
㉞本当に　　つ	
㉟本当に　　つ	
㊱本当に　　つ	
㊲本当に　　つ	
㊳本当に　　つ	
㊴本当に　　つ	
㊵本当に　　つ	
㊶本当に　　つ	
㊷本当に　　つ	
㊸本当に　　つ	
㊹本当に　　つ	
㊺本当に　　つ	
㊻本当に　　つ	
㊼本当に　　つ	
㊽本当に　　つ	
㊾本当に　　つ	
㊿本当に　　つ	

本当に　　つ

①本当に　　つ

②本当に　　つ

③本当に　　つ

④本当に　　つ

⑤本当に　　つ

⑥本当に　　つ

⑦本当に　　つ

⑧本当に　　つ

⑨本当に　　つ

⑩本当に　　つ

⑪本当に　　つ

⑫本当に　　つ

⑬本当に　　つ

⑭本当に　　つ